1 ふるさとの偉人伝

① 日本一の酒米
―山田錦の父　山田勢三郎―

小学生の美穂さんは、中区坂本の田植えに参加しました。「山田錦」というお米の田植えです。山田錦は「酒米（酒造用に作った米）の王様」といわれ、多可町だけでなく、いろいろな地方で栽培されています。

美穂さんは、お父さんから、山田錦の母親にあたる「山田穂」というお米が中区で生まれたことを聞きました。父親にあたるのは、滋賀県で育った「短棹渡船」というお米だそうです。美穂さんは山田錦について興味がわき、調べてみることにしました。

山田穂は、山田勢三郎という人が作ったお米です。

天保14年（1846）、勢三郎は東安田村（現在の中区）の豪農（多くの土地、財産を持ち、地方で勢力のある農家）の家に生まれました。2ヘクタールあまりの田地をたがやし、多くの小作地（小作人に貸している土地）も持っていたといい、米倉は中区だけでなく、黒田庄村（現在の西脇市）にもあったと伝えられています。

中区南部から西脇市北部にかけての一帯は「安田郷」と呼ばれ、米づくりのさかんなところでした。東安田村は一橋領（徳川将軍家の分家・一橋家の領地）で、「安田米」の産地として知られていました。勢三郎は酒米も作り、2000俵もの米を酒造家に売っていたそうです。そして、勢三郎がなにより熱心に取り組んでいたのが、米の品種改良（作物や家畜などを人間により役立つように作り出すこと）でした。当時、いっしょうけんめい農業に力をつくす、勢三郎のような人たちを、「老農」とよんでいたそうです。

明治10年（1877）ごろ、勢三郎は、自分の田んぼの中に、りっぱな稲穂を見つけました。喜んだ勢三郎は、その稲穂を調べ、大きい米粒をえらび出し、翌年その種籾（もみがらのついた米で、種子としてまくもの）をまき、大切に育てました。その次の年も、次の年も、同じことをくり返し、とうとう大粒で質のよい酒米を育てることに成功しました。この稲は、勢三郎の名をとって、山田穂と名付けられました。

勢三郎は、小作人や近所の農家にもその種子を分け与え、山田穂がたくさん生産されるように努力したそうです。自分だけでなく、みんながいい酒米を育てて、ゆたかなくらしができるように願っていたのでしょう。山田穂は、明治20年代には多可郡内で広く栽培されるようになりました。勢三郎は、米俵に一俵一俵「山田穂」という焼き印（あつく熱した金具をもちいて印を付けること）を押させたそうです。それは、米俵の中のお米が質のよい山田穂であることをしめすものでした。そうした努力をかさね、山田穂は兵庫県内で代表的な酒米として知られるようになりました。

勢三郎は、このほかにも農業を広く研究し、池を作ったりもしました。その功績（すぐれたはたらき）をたたえて、明治37年（1904）、勢三郎の家の近くに頌徳碑（功績をたたえるための碑）がたてられました。勢三郎が61才のときのことです。その2年後、勢三郎は肖像画（その人ににせて、その顔やすがたをかいた絵）をえがいてもらいました。羽織袴の正装（あらたまった場所などに着ていく正式な服装）で、扇子を手にしてすわっています。その肖像画からは、おだやかでまじめだったという人柄がよくつたわってきます。頌徳碑は、平成元年（1989）、県道139号線沿いの石原坂トンネル公園に移設されました。

大正8年（1919）、勢三郎はなくなりました。その4年後、大正12年に、兵庫県立農事試験場（農業技術について研究するところ）で、山田穂と短棹渡船がはじめて交配（雄花と雌花を掛け合わせて新しい種を作ること）されます。そして、研究がかさねられ、昭和11年（1936）に、山田錦という新しい品種としてみとめられたのでした。山田錦生誕70周年にあたる平成18年、多可町は「日本酒で乾杯の町宣言」をしています。

美穂さんは、歌手の加藤登紀子さんをまねいて、多可町で10月1日に行われていた「日本酒の日コンサート」のことを思い出しました。平成5年から、30年間もつづいたそうです。美穂さんは、風にそよぐ山田錦の稲穂の中に、山田勢三郎の笑顔がうかんでくるような気がしました。